

盗 強 車 轉 自

消兵衛といふ者に聞て見ると、全く高田は逃げたのに相違ないといふのだ。内田フーン……では何か其家で居たのか。増田無論……僕の事だから近所で委しく聞て見れば、其者と言つても好いぢやアねへか。内田成程、シテ見ると何うも怪しい手、掛り警部は何と言つて居らるゝ。増田「無論怪しいから手分して捕縛しろつて、今居所へ見へる筈だ」と結しの内田に石井掛り警部も其席へお立合になりまして、石井「今五條の署から電話で以つて来たよ、大川友藏は肺病で府立病院に入院して居るから、犯罪の嫌疑はないと……」増田「へー、スルど愈上高田一人しか嫌疑者はございません手、石井「マア然うだ、内田「然うでございませす手、自分等の考へも高田が怪しい様に

盗 強 車 轉 自

思ひますが……杉本君の考へは何うだ。杉本「然うさねへ、怪しい事は怪しいが自分の考へはチト違つて居るよ、其所へは斯う思ふのだ、銘々思ひく、に工風して兎に角端緒を探り出す事にして、意上端緒が附ばお互ひに其方面に力を合はして御同然の仕事にせうぢやねへか。石井成程、夫りや好い思案だ、自分も此掛になつたのだから君達が骨折て呉れば、誰れ彼なしに三人の中へ、特別に懸賞を出す事に仕様、尤も本署から賞金は別途に出るのだから、自分の呈するものは煙草錢にも足りないが、金の多少に拘はらずこれを取つたものは、此事件の一等賞牌だから、第一番に端緒を探つた者が賞金の半額を一人りで取るのだ、後の二人は残り半額を二人で分るとして、兎に角競つて骨折て貰ひ度いものだ。内田「コリヤ面白うございませす手、承知しました一生懸命でやりませう、チへ



盗 強 車 轉 自

でございませうか 箱職「はい隣の花緒やさんは五六年前から居  
られます、何かお聞合せですか 杉本「はい外の事でもございま  
せんが、私しに一人の娘がございまして花緒の職が習ひ度と  
申しますので、都合によればお隣りへ願ひ度と存じますが、  
お家の御家族は幾人さんでございませう、一寸お聞し下さい  
ませんか 箱職「然うですす、家の人は夫婦二人りですが職人  
は二三人のときも四五人のときもありますよ 杉本「左様で  
ござりまするか、イヤ大きに有り難う存じます、一寸と夫れ  
だけ聞きましたらまたよく考へる事でございます、御序に伺ひ  
ますがお家の方の御氣質は何うでございませう何も縁に來す  
のでございませんから、何うでもよいのでございませうがチ  
内氣の娘で困りますから、余りお六ツケ敷方では幸抱が出來  
ぬかと存じまして……、種々な事をお聞申しますか 箱職「はい

盗 強 車 轉 自

うですなへ、貴郎が其所までお聞なるといひますが、マア  
あまりよくない方でございますから、大体ならお見合しなさ  
るがよるしうでございませう、外の内は何所でも女房の方がい  
けないものですが、隣の家は亭主の方が邪見な人で現に自分  
の伯父が伏見に居るのも、早く死ねばよいなとといふ人で  
すから、随分氣の荒い人間といふ事が分ります、此箱屋の亭  
主の一言は杉本刑事の耳に、百雷の響より強くこたへました  
ナセたと申しますと、伏見の伯父が早く死ねばよいといふ  
言葉と、汝私しが邪魔になるので殺に來たなどいふ、言葉は  
此犯罪に附て尤も根據のある言葉でございませうから、其所で  
杉本特務は尙ほ空トボケして頻に亭主に追従をいひながら、  
杉本「何うも有り難う存じます、お影で何も彼もよく分りました  
てございませう、お手を止めて恐れ入ります」とすく其家を出



自 轉 車 強 盜

増田君も行だらう。増田「無論さ、自分は何うでも高田だと思ッ  
て居るから、一番杉本と競って行氣だ。杉本「どうも然う向はれ  
ては困る子、愈よと来た日にや僕の力にもなつて呉れないで  
は一人て困るから。増田「夫りや互ひの事よ、愈よと来りやア  
御同然は扱置て、警部でも署長でも總出で手傳て貰はないで  
はこまるよ。石井「無論さ、然なつて来りやア互ひの手柄だか  
ら誰彼なしさ、何でも早く犯人さへ捕まへれば好のだ。杉本「よ  
るしうございます、では互ひに工属してやりませう。増田「夫  
れが好い」と輪藏が一決致しましたから、これから三人の特  
務方が種々身を扮して探偵の端緒を附けるといふ一段でござ  
います。一寸一息して直ぐ進じる事にいたします。

(中)

自 轉 車 強 盜

エト諸君もよく御承知の如く、歐米諸國では探偵社といふも  
のがございまして、廣く探偵事件を引受る會社があると申ま  
す。我が國にはこれに類似のものはありまして、また刑事  
の探偵社がございせんから、一層特務方のお骨折でござい  
ます。伏見警察署の杉本刑事は、有名な敏腕家でございまし  
て、如何なる難件でも過つた事のない方でございます。杉本  
今度の事件も何れも衆に先立て功を奏せんものと、一人り  
大阪の内寺堂寺町二丁目の河野太助の宅をお調になりまし  
た。所が此河野太助の宅は下駄の花緒商で、店には三人の職人  
が花緒を縫ふて居て、其傍に女房らしき廿八九の女が職人に  
いる。指押して居りますから、様子を見て置て直き東  
隣の箱職の家で、杉本「一寸お尋ね申します、此お隣の花緒や  
んは久しくお隣にござる方ですか、又此頃お移りになつた方



盗 強 車 轉 自

でございませうか 箱職「ハイ隣の花緒やさんは五十年前から居  
られます、何かお聞合せですか 杉本「ハイ外の事でもございま  
せんが、私しに一人の娘がございまして花緒の職が習ひ度と  
申しますので、都合によればお隣りへ願ひ度と存じますが、  
お家の御家族は幾人さんでございませう、一寸お聞し下さい  
ませんか 箱職「然うですす、家の人は夫婦二人りですが職人  
は二三人のときも四五人のときもありませう、一寸と夫れ  
ござりまするか、イヤ大きに有り難う存じます、一寸と夫れ  
だけ聞きましたらまたよく考へる事でございませう、御序に伺ひ  
ますがお家の方の御氣質は何うでございませう何も娘に來す  
のでございませんから、何うでもよいのでございませうがチ  
内氣の娘で困りますから、余りお六ツケ敷方では辛抱が出来  
ぬかと存じまして……へ、種々な事をお聞申します箱職「來

盗 強 車 轉 自

うですなへ、貴郎が其所までお聞なるといひませうが、ア  
あまりよくない方でございませうから、大体ならお見合しなさ  
るがよるしうございませう、外の内は何所でも女房の方がい  
けないものですが、隣の家は亭主の方が邪見な人で現に自分  
の伯父が伏見に居るのでも、早く死ねばよいなといふ人で  
すから、随分氣の荒い人といふ事が分ります、此箱屋の亭  
主の一言は杉本刑事の耳に、百雷の響より強くこたへました  
ナセたと申しませうと、伏見の伯父が早く死ねばよいといふ  
言葉と、汝私しが邪魔になるので殺に來たなといふ、言葉は  
此犯罪に附て尤も根據のある言葉でございませうから、其所で  
杉本特務は尙ほ空トボクして頻に亭主に追従をいひながら、  
杉本「何うも有り難う存じます、お影で何も彼もよく分りまし  
てございませう、お手を止めて恐れ入ります」とすく其家を出



盗 強 車 轉 自

て 杉本「サア旨い何うやら端緒が付きさうだ、全く伯父の財産を目的にアノ河野が殺したのだ、然うでなくば財産を盗らぬが人を殺す必用がない、高田熊吉が其夜に逃走したのは怪しい様だが、人を殺して逃げるものが家に戻つて賭道具を片付けるなどの猶豫がない、又殺すまでに片付たと言はなければ、果して殺し得らるゝや否や知りぬ先に片付たと言はなければならぬ、其ノ道理のない事は何ば馬鹿なものでもする筈がない、何うしても今度の犯罪者は太助に違ひない、とした所でこれから先の探偵が困難だ、何うしたものか」と頻りに思索して居りました、何加工風の附たものか急に松屋町筋へ出て、一寸牛肉屋へ這入つて十分支度をいたし時の移るをまつて居ります、スルと其日も午後六七時頃になりましたから、杉本刑事は再び河野の近邊に迂路して様子を探つて居られます

盗 強 車 轉 自

る、スルト十五六の職工か手に辨當をさけて河野の家を出て安堂寺橋東詰の渡を南へ、道頓堀を西へ、又黒門筋を南へ三丁程往つた關屋口の西側の裏の小口から三軒目の家へ道入ますから、篤と様子を見て置いて其日は宿に歸り、翌日朝早く商人体の風俗で其職工の家へやつて参りました、杉本「ハイ御免下さい、私しは天満の花緒商の者ですが、貴家の家から河野のオ、其所に居られるか娘だ、突然に妙な事いふ様ですが、貴家の娘さんの仕事はまことに仲間の評判がよいので、どうか私の家へ来て貰ひ度いと思ふのた、手間は幾等でも出しますから」と刑事丈に旨く商法家に化けて言ひ込みますから先ずの家でも本當だと思ひまして、老女「是はく御遠方から、御心切に有り難う存じます、實は河野さんの方へ出て居ります



自 轉 車 強 盜

が、辨當持で二拾錢でございますから、辨當料と履物代に皆  
消へて仕舞て割に合はぬと申て居りますの、手問貸さへ増し  
て下さいませれば、何方等へでも参るのでございます。杉本  
れは早速の承知で有り難い、夫れでは来て貰ふ事にして、然  
うものが極れば私しの家規で、印し金として登圓ツ、手  
間賃の外に渡すのだ、イヤ辭退する程のものじやありません  
ん、其代り今日は一日河野の方を休んで、これまで河野の方  
で何んなことをして居たか、又河野の家の萬事のやり方が何  
な風であつたか、夫れを委しくいふて貰ひ度のだ。老女「はい、  
夫れは何より安い事でございます、コレお花煙草盆の火を入  
れて持つてお出で、マア賃料こちらへお上り下さいまし。杉本  
イヤ構ふて下さるナ、といふもの掛ながらはなしも出来ぬ  
ではあけて貰ひませう。老「マアどうぞお上り下さいまし」と

自 轉 車 強 盜

これより杉本刑事が上にあがつて煙草一二服飲む内に、職工  
のお花も傍に来て挨拶しますから、杉本「イヤ大はさにか邪魔を  
します、幾歳になります、十六か十七か、花「ハイ十六でござ  
います、杉本「ハ、イン十六か、十六にしては確乎したものだ  
時にアノ河野の家は大變評判のよくない家だが、お前方には  
何うなよく気が附くかな、花「イエ中々其んな事はございませ  
ん、随分酷い方でございます、杉本「サア然ういふ評判だが、長  
くアノ商賣をする氣なら職人は大事にする筈だが、ナセ其  
なに酷くするのだらう、花「アノ家は長く花緒商はせぬのでご  
さいませう、其んな事を一寸聞きましたから、杉本「フイン然う  
か、何か外に家督でもあると見へるナ、花「何も家督といふ  
てはありませんが、伏見にゐる伯父さんが澤山金を持て居ら  
れるので、夫れを預けて居られました、今度其伯父さんが



盗 強 車 轉 自

死なれましたから、其金が皆アノ家へ這入のぢやと申します  
の 杉本 旨いはなしたき、私しも其ンな伯父さんがあればビス  
トルで殺して流れ込をとつてやるが、然う旨は行かないよ、  
花 イエ夫れが妙ぢやとさいますせんか、其伯父さんがビス  
トルで殺されたのでさいますの 杉本 エ、ビストルで殺された  
妙だ子エ、甥の河野が殺したのぢやアないか子、どうも怪し  
い子エハ、まさか伯父甥の中で其ンな亂暴もせまい、子エ  
お袋 〓と次第にはなしを母親の方へする様にしすから、老  
人も膝をすゝめまして 老女 イエ申し、人の口には戸が立られ  
ぬと申しまして、人はいろく〓の事を申すものでさいます  
今度 其伏見の伯父御がビストルで殺されたのを、アノ河野の  
大將の所爲だといふ人がございますの、夫れも儲に知れた事  
ではございませせんが、伯父御の殺されたのが此月の六日で

盗 強 車 轉 自

さいまして、其五六日まへに河野の旦那がビストルを買ふて  
来たのでございますから、夫れで其ンな事をいふのでござい  
ます、兎に角時が時だけに人が彼是いふのでございますよ  
杉本 夫りや然うだ時と其んな物を買つたからいけないが  
全く人の誹謗だらう、第一伏見に居る伯父を大阪に居て殺す  
事は出来なひもの、夫りや全く悪説だらうよ 花 イエ然うも  
いへませぬの 杉本 エ、其夜は六日の夜か子 花 イエ左様でござ  
います 杉本 フーン、其奴アチト怪しい子、然して其ビストル  
は今でも家にあるのだらうか 花 夫れが變じやとさいますせん  
か、何も仔細のないものなら隠すに及びませぬが、其ビス  
トルを様の下へ隠したのを見たりものがございますの 杉本 〓上様  
しい子 花 しかし此ンな事を私しがいふたとは仰しやらぬ様



盗 強 車 轉 自

に願います 杉本「誰れが其ノな事を他にいふ奴があるものか、  
しかし何うして夫れを見たのだらう 花夫れが妙ぢやありま  
せんか、妾しの次の職工のお愛といふ子が、裏の雪隠へ這入  
て居りましたら、親方がヒストルを懐から出して襟の下へ投  
込たのでございます 杉本「では今でも其儘隠してあるのだ子、  
花然うでございますよ 杉本「親方は其子に見附られた事を知  
らないのだらうねへ 花夫れは知りませんの、夫れで親方は  
誰れも知らぬと思ふて居られますが、職工中ではやかましく  
いふて居ますの 杉本「フーン、イヤ面白い話しを聞て思は守長  
居しました、ではどうか私の方へ来て下さい、いづれ改た  
めて約束に来るが、マア夫れまでは知らぬ顔で河野の方に往  
ッて居るがよい、其内また来ますから」と其所へにいひ捨  
て露路を出た杉本刑事は小睡して喜びました。

盗 強 車 轉 自

杉本刑事は職工お花の話を聞て、鬼の首を取つた如く喜びま  
して、直ぐ伏見へ歸つて掛り警部に復命をする氣で瀛車の乗  
場まで参りますと、恰も好し向ふから掛り警部の石井が手  
鞆さげてやつて参られますから 杉本「オ、警部ですか何か急用  
ですか、例の事件は端緒が附ましたよ 石井「オ、杉本、君も大  
阪へ来て居たのか、夫れではいるく話しがある、兎に角飯  
でも食ふておるく 仕様」と櫻橋の話の九定へ這入て支度を  
命じながら 石井「流石杉本だ、一度の犯罪者を大阪に在ると見  
たのは感伏する、だが端緒は何所等まで探つた子 杉本「聞て下  
さい、實は是れくでございます」と警部が聞て驚くかと思ひの外少  
なしを委しく述べます」と警部が聞て驚くかと思ひの外少

(下)



自 轉 車 強 盜

しも驚きません。非、一、ン余程よく探りました。だが夫では十分犯罪者と見られないよ。實は今度の犯罪の現物に於てはやくも犯罪者を太助と白服だから、夙に大阪に手を入れて捜索させた所、今君のいふ如く、十に八九まで太助といふ事は知れて居るが、六日の夜に太助が新町の林檎といふ家で娼妓と同食して居たといふ証據があるのだ、レヲ見ると六日の夜の犯罪は午前一時で、終列車に乗事も出来ぬ刻限に如何に他の証據物があつても、大阪の新町に寝て居るものが犯罪者とは言はれないぢやないか、また共犯者でもあつて其手を借つたとするもこれに對する証據物がないのだから困るよ、其所で今日出張したのは、新町の林檎に就て、何時から何時まで太助が居たかを確める考へたから、君も同道するがよい、杉本「へい」と警部の言葉を聞た杉本は、千俵の谷間へ落さ

自 轉 車 強 盜

れた如く落膽してかきましました。杉本「では何でございますか太助が其夜新町で遊んで居たのを見た者があつたのでございませう。石有た所ぢやねへ、現に西警察署の刑事が其夜他に調べものがあつて林方へ詰つた時に、太助が山下席の花妻といふ娼妓を聘して居たといふのだ、其時が午前二時過ぎだといふから不思議ぢやねへか、杉本「へい」と言つたさう、今この今まで十分犯罪者と思つて居た太助が大阪に居たといふのでございませう。其夜太助は宵に一度來ら案外でございます、其所で警部も刑事も其所々に支度して、新町の林檎で調べて見ますと、其夜太助は宵に一度來て馴染の娼妓花妻を呼んで居て、寄席に往て一時過ぎに戻つて寝たといふのでございませう、寄席に往たか何所へ往たか知れぬまでも、一時過ぎに戻つたとすれば、全く此犯罪者は



自轉車強盜

太助でないといふ事が怪りましたから、松本刑事の落膽は非  
常でございませす、お話しかはりまして高田熊吉を犯罪者とし  
て探偵して居る増田、内田の両刑事は、日々手分して熊吉の  
踪蹟を探つて居られましたが、一日伏見中將島の舟乗場へ  
頭同士の者が、○太右衛門よ、豊後町の熊吉は何うしたのだ、此  
頃顔を見せぬぢやないか、△オ、熊か熊は夜抜して大阪へ往  
ッたよ、○ナセ夜抜したのだらう、△ナセッてチト筋の悪い  
金を借つて夫れが紛れて、人には言へねへが其金を貸た者を  
ひ目に合はしたのだ、○フーン大阪ッて大阪の何所に居るの  
だらう、△此間岩松が逢ふた時、勘助島で上荷乗をして居る  
ッてはなししたといふよ、○然うか矢ッ張舟乗は舟乗しか仕方  
がないね、と頼りに熊吉の話をして居りませすからこれを聞  
た増田刑事が伺りしてす々特務室へ歸けて戻りました、増田内

自轉車強盜

田々々、知れた、内田何だ突然に伺りするよ何が知れたの  
だ、増田何がッて高田熊吉の在家よ、内田ナニ高田の在家が知れ  
た、夫りや何所だ、増田大阪の勘助島で舟乗をして居るのだ、  
今中將島の乗船でこれ、△のはなししたッたから、兎に角  
貸主を越ひ目にあはしたといふは怪しいぢやねへか、君も来  
て呉れ給へす、大坂へ行くから、内田ワン諸、す々出かける事  
に仕様、杉本も大阪に居るといふから何でも此方等は旨くや  
らないといけな、増田無論サ、地を打ッ穂ははづれても此  
眼力は動かぬ見込だ、内田マア高言は後にして、行かうぢやねへ  
か、増田夫れが第一だ、と両刑事が急に支度いたして大阪へや  
つて参りました、御承知の如く勘助島と申しましても中々  
い所でございませす、殊に舟乗をするものが澤山ございませ  
から、一寸熊吉の在家が知れません、其所で増田と内田の両



盗 強 車 轉 自

刑事が宿を極めて、別れに渡々を探しましたかどうも知  
れませんが、其所で増田は氣を腐らして増田「エ、だめだどうも  
知れない、内田も大方宿へ歸へつたらう、僕も最上歸らう日  
が暮れて来た」と獨りつゝふやきながら三軒家の方へ来たり  
ますると、〇且那まだ熊吉の在家が知れませぬか」と隠をか  
けるものがございいますから、胸りして見ると巖に熊吉の在家  
を問ふた船頭だから増田「オ、お前は最前熊吉の事を問ふた船  
頭さんだ子、最上仕事仕舞か子、〇「はい左様でございいます、  
増田「私も熊吉の在家が知れぬから最上歸へる積りだ、〇「は、  
うしても知れませぬか増田「どうも知れないよ、〇「では、  
と思つて此向ふの畑の中に此頃上町から来たものがございま  
すから、夫れをお尋ねなすつたらどうでございいます、増田「  
はございませせんが此頃来たものだとはいひますから増田「

盗 強 車 轉 自

、然うか子、舟乗でなくば遠ふか知らないが、兎に角聞て  
見様」と伺くわしく方角を開て日の暮るも厭はずやつて参ら  
れますると、如何にも畑の中に怪しい一ツ家があつて、内に  
明が見へますから、小家の外から内の様子を覗いて見て胸り  
したのでございいます、ナセ其の内に胸りしたと申しますると  
其小家の内に居た者が同寮の刑事杉本でございいます、増田は夫  
を見て胸りしましたから増田「ヤ其所に居るのは杉本ぢやねへ  
か、杉本「オ、増田「か、君は僕の是所に居る事を誰れに聞たのだ  
増田「ナ、僕は君がこんな所に居ると知つて来たのぢやねへ  
是れ、是れ、の始末でこゝへ来たのだ、杉本「ウ、然うか何  
でも好い、よく来て呉れた早速力を借なければならぬ、犯罪  
者が知れたのだ、増田「ナ、犯罪者が知れた、ヤ、何處に居る  
杉本「主犯者は河野太助だから、すく伏見へ電報を打つて續



自轉車強盜

して貰ふが、差かゝり困るのは上町の河野の宅の娘アを縛し  
て、様の下にヒストルがある筈だから、夫れを押収して貰ひ  
たいのだ。増田「諸々、幸ひ内田も来て居るから安心し給へ。杉本  
ナニ内田が来て居る夫れは幸ひだ、では君と内田で上町の方  
をやつて呉れ給へ、僕は石井警部が宿に待て居られる筈だか  
ら、此所に在る自轉車と共犯者を警部に手渡しして、すぐ君  
等のあとから伏見へ歸るよ。増田「諸々安心し給へ、所で僕が伏  
見に居たとき聞いたのは、河野太助は六日の夜新町の青樓に居  
た証據があつて全く犯罪者でないといふたのぢやねか。杉本  
然うよ、所が僕の考へるに、昨夜宵から其青樓にスツト居た  
のなれば、怪しくは思はないが、假令どうあらうと一時過ぎま  
で他へ往て居つたと思はないが、其後非常の苦心で、毎日河野  
の家へ出入りするやうの後は、其後非常の苦心で、毎日河野

自轉車強盜

から時々河野の家へ通ふやつがあるから、此奴曲者だと此小  
家へ来て様子を見て、此自轉車が茲にあつたから、フーン扱は河野めが自  
轉車にのつて伏見で兇行をやつたのだナ、と斯う目を附けた  
のだ。増田「ソノ流石杉本が感伏した、ソノ夫れかもうし  
た。杉本「其所で僕が此小家の若者を尋問して誰れの自轉車だと  
聞くと、言葉を巧みにいひ扱はせようとするが、田舎同様の小家  
こ不相應な自轉車は、全く河野が伏見の犯罪の用は供したの  
だらうと責め立て尋問したから、終に白状して實を吐居つた  
のだ。増田「フーン、では何だか、宵に新町へ一寸顔出して寄席  
に行く如く言つてすぐ自轉車に乗つて伏見へ来て、銀貨を七た  
のたね、杉本「然うよ。増田「成程一寸新手なやう方だね、二衛は來  
て又、其夜に戻つて居れば、流車のない時間だから、さうし



自 轉 車 強 盜

ても犯罪者とは見られないが、流石杉本は自轉車に目が附て  
 犯罪者を現はしたのには僕等の及ばない所だ。杉本「ナニ然うで  
 ねへよ、全くは天の網で犯罪者の現はれる時節が来たのだ、  
 時に彼は言ッて居ては時刻は延るからすぐ手廻にかゝらうで  
 はねへか、増田「夫れが好い」をこれより總掛りで、河野太助、  
 太助の女房、共犯者の若者を捕縛して夫々刑に行はれたのは  
 本年の五月末であつたと申しますが、自轉車泥棒とか言ッて  
 一時は京伏見で評判だつたと申ししますのを、博多氏のもどり  
 によつて斯く演じました事でございませう、扱よくこそ御幸抱  
 なさいました。

自轉車強盜終

明治三十四年七月五日印刷  
 明治三十四年七月五日發行

血染の片腕奥附

發行者 博多 久吉  
大阪市南區長堀橋筋二丁目七十九番邸

印刷者 岡島 幸治郎  
大阪市南區巖谷仲之町五十三番邸

發賣所 博多 成象堂  
大阪市南區堺筋八幡筋東南角



不許

複製



●消閑の好伴侶●

●自習三味線獨案内

正價六廿錢  
郵券代用一割増

南は扇子樹下芭蕉扇に涼を入れるトマコラより、北は爐邊に濁酒を酌みて寒を防ぐ干島に至るまで人として音楽の嗜好あらざるなく、國として樂器あらざるなし、然れども、我國に行はるゝ三味線の如く、獨奏に宜しく、合奏に宜しく、高尙なる音も發すれば、意氣なる音も發する者なし、況んや其構造簡にして、單に指頭と鐵との作用に因て、各種精緻の曲を發するを得るの点に於て他の百千の樂器に勝れる、美術的の妙味を認む、然れ共學び難くして其奥を極むるに難きも、又此三味線に如く者なし、本書は、著者が多年の苦心に因りて此の困難なる樂器を平易に練習し得るの方を發見し、是れを詳細に記述したる者にして、三味線の歴史より、姿勢の事、譜の事、感所の事、使用法の事等、悉く列記しあれば、音樂に關して些の素養なき者と雖も、本書に因て獨習なせば、如何なる難奏の曲と雖も、自ら練習するを得べし、江湖の酷彦よ、世間幾多のヲモ獨習書と同一視せず、一讀以て其名に負かざるを知り賜へと云爾。



新刊豫告

- 神田伯龍講演 難波戰記後日譚 刊既
- 藤井南龍講演 本朝三加太彌太郎 刊既
- 尾崎東海講演 楠公記 刊既
- 神田伯龍講演 眞田大助 刊既
- 石川一口講演 久松桃太郎旅日記 刊既
- 石川一口講演 柳生飛驒守 刊既
- 神田伯龍 慶安太平記 刊既
- 本朝三加太彌太郎 阿波騒動 刊既
- 藤井南龍 朝比奈彌太郎 刊既
- 尾崎東海 遊藝全集 拾冊 刊既
- 神田伯龍 柳生但馬守 刊既
- 石川一口 柳生但馬守 刊既
- 石川一口 演舌獨稽古 刊既
- 有文居士 尺牘新案用文大全 刊既

博多成象堂出版目錄

- 神田伯龍講演 九山平次郎連記 難波戰記 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 神田伯龍講演 九山平次郎連記 合戰 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 神田伯龍講演 九山平次郎連記 合戰 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 神田伯龍講演 九山平次郎連記 賊曉星五郎 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 石川一口講演 九山平次郎連記 柳生但馬守 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 石川一口講演 九山平次郎連記 柳生但馬守 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 氏原魯山講演 山田掃一郎連記 水戸北國漫遊記 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺
- 三省社伯馬講演 機橋貞二連記 天下野勘左衛門 正價廿五錢 郵稅八錢 洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺



三省社一聯講演  
山田平次郎連記

關口彌太郎 正價三十錢  
郵稅八錢

玉田玉麟講演  
山田平次郎連記  
關口八郎 正價卅錢  
郵稅八錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
中山間答 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
中山大納言 正價卅八錢  
郵稅八錢

石川一口講演  
丸山平次郎連記  
久松桃太郎 正價卅八錢  
郵稅八錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
神田伯龍講演  
丸山平次郎連記

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
神田伯龍講演  
丸山平次郎連記

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
神田伯龍講演  
丸山平次郎連記

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
神田伯龍講演  
丸山平次郎連記

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
神田伯龍講演  
丸山平次郎連記

石川一口講演  
丸山平次郎連記

客三郎 正價卅五錢  
郵稅八錢

三遊亭花遊口演  
丸山平次郎連記  
若長治 正價卅八錢  
郵稅八錢

伊賀越後日仇討 正價卅五錢  
郵稅八錢

水戸門中國九州漫遊記 正價卅八錢  
郵稅八錢

西尾東林講演  
丸山平次郎連記  
天明八人白浪 正價卅八錢  
郵稅八錢

西尾東林講演  
丸山平次郎連記  
天明八人白浪 正價卅八錢  
郵稅八錢

西尾東林講演  
丸山平次郎連記  
天明八人白浪 正價卅八錢  
郵稅八錢

西尾東林講演  
丸山平次郎連記  
天明八人白浪 正價卅八錢  
郵稅八錢

西尾東林講演  
丸山平次郎連記  
天明八人白浪 正價卅八錢  
郵稅八錢

西尾東林講演  
丸山平次郎連記  
天明八人白浪 正價卅八錢  
郵稅八錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

神田伯龍講演  
丸山平次郎連記  
あごみ小僧 正價卅五錢  
郵稅六錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢

東林講演  
丸山平次郎連記  
毒婦おすみ 正價卅五錢  
郵稅八錢



新撰 劍舞獨譜古 正價十錢 郵稅四錢

山野 山畫 美術名所 正價十錢 郵稅四錢

山野 山畫 美術山水 正價十錢 郵稅四錢

前野 春亭 美術萬物 正價十錢 郵稅四錢

山野 山畫 美術鳥譜 正價十錢 郵稅四錢

前野 春亭 美術浮世 正價十錢 郵稅四錢

前野 春亭 美術實用 正價十錢 郵稅四錢

市町 村便覽 正價八十錢 郵稅廿錢

軍歌 一萬集 正價十錢 郵稅四錢

日清 遊藝 一萬集 正價五錢 郵稅四錢

日清 支那 大敗 正價八錢 郵稅四錢

新撰 新撰 新撰 正價十錢 郵稅四錢

新撰 新撰 新撰 正價十錢 郵稅四錢

新撰 新撰 新撰 正價十錢 郵稅四錢

新撰 新撰 新撰 正價十錢 郵稅四錢

新撰 新撰 新撰 正價十錢 郵稅四錢

新撰 新撰 新撰 正價十錢 郵稅四錢

百人一首註解 正價十二錢 郵稅四錢

生花早指南 正價十二錢 郵稅六錢

萬國年代記 正價十錢 郵稅四錢

萬國明細全圖 正價六錢 郵稅二錢

大阪市街全圖 正價十錢 郵稅二錢

日本軍歌 正價十錢 郵稅四錢



花柳散士編 ●かくし藝 洋装美本全一冊 正價十二錢 郵税四錢	●手風琴獨稽古 洋装美本全一冊 正價廿五錢 郵税四錢	利蝶散士編 ●さわり百段集 洋装美本全一冊 正價十二錢 郵税四錢	●良新書さかし 正價四錢 郵税二錢	●新築書さかし 正價四錢 郵税二錢	●西洋手奇手品 正價四錢 郵税二錢	●改訂一輪加 正價四錢 郵税二錢
--	-------------------------------------	--	-------------------------	-------------------------	-------------------------	------------------------

弊店儀愛顧各位之御  
 引立に因り商業目増  
 に繁昌仕候段肝に銘  
 じ雖有奉存候付ては  
 非常の勉強を以て卸  
 小賣共多少に關せを  
 他版と手版とを分た  
 せ誠實に迅速に御注  
 文に應じ候間倍舊御  
 眷願之程希望仕候也

博多成象堂主人  
 敬白

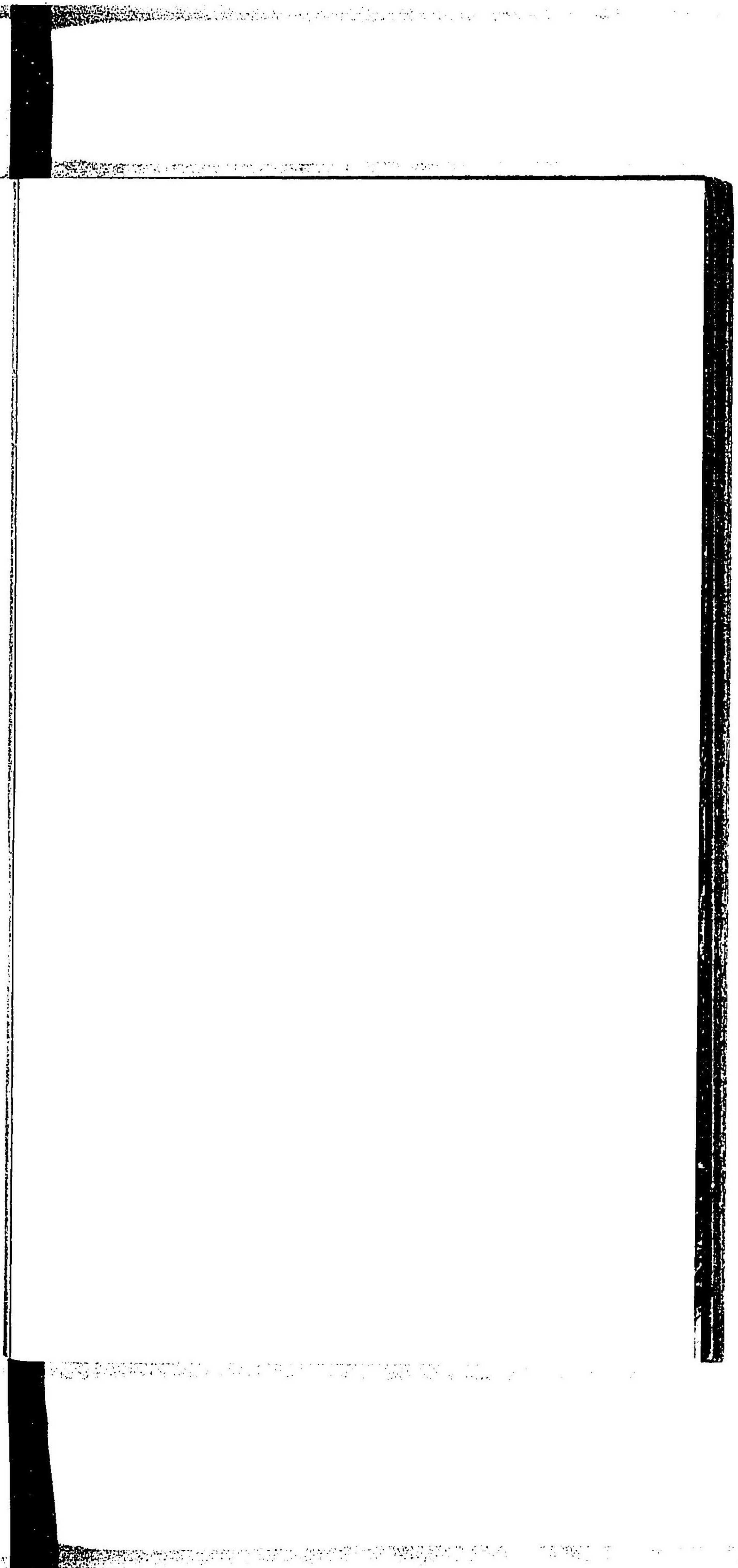




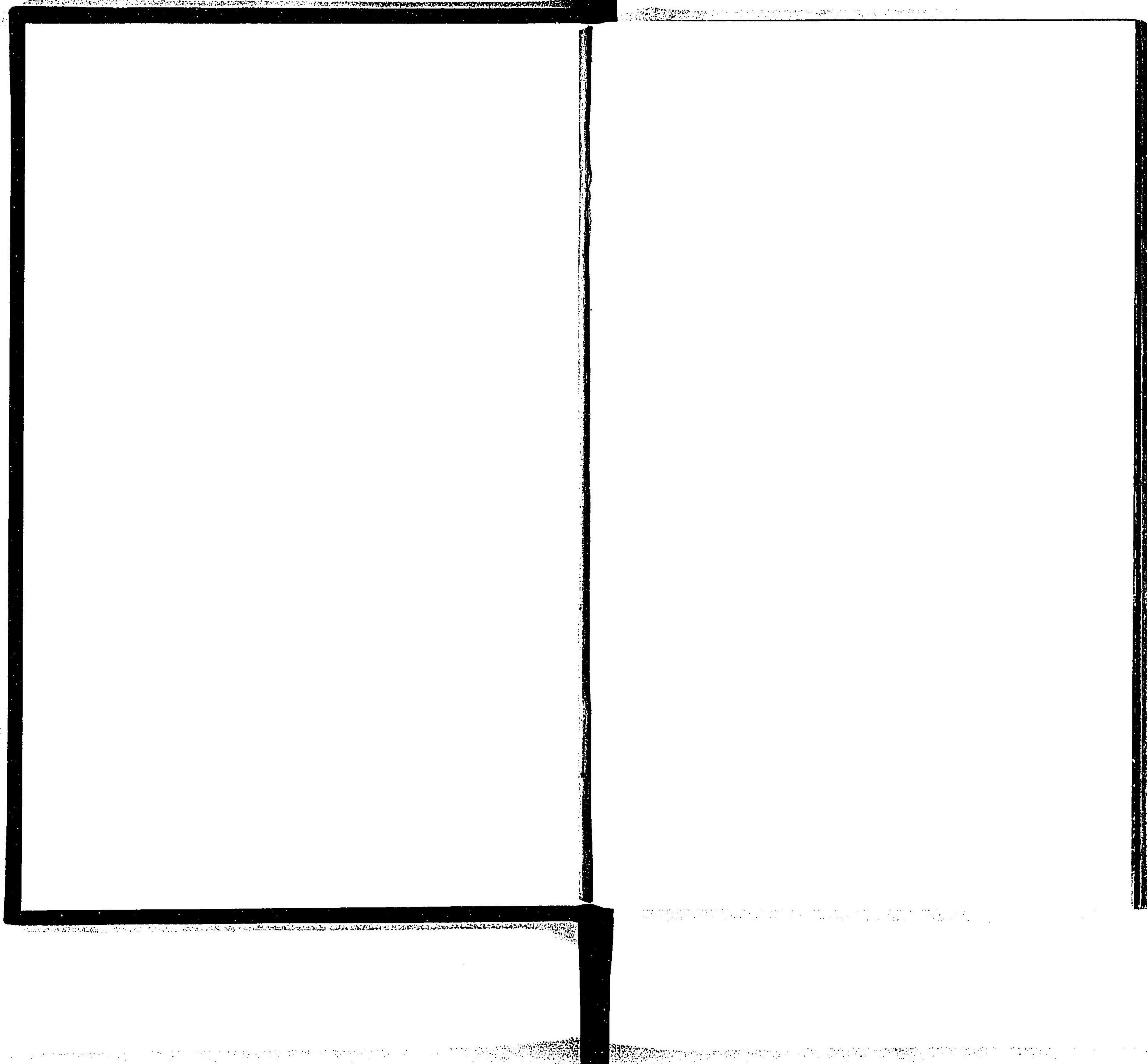
I-H-16

五  
下  
三  
拾

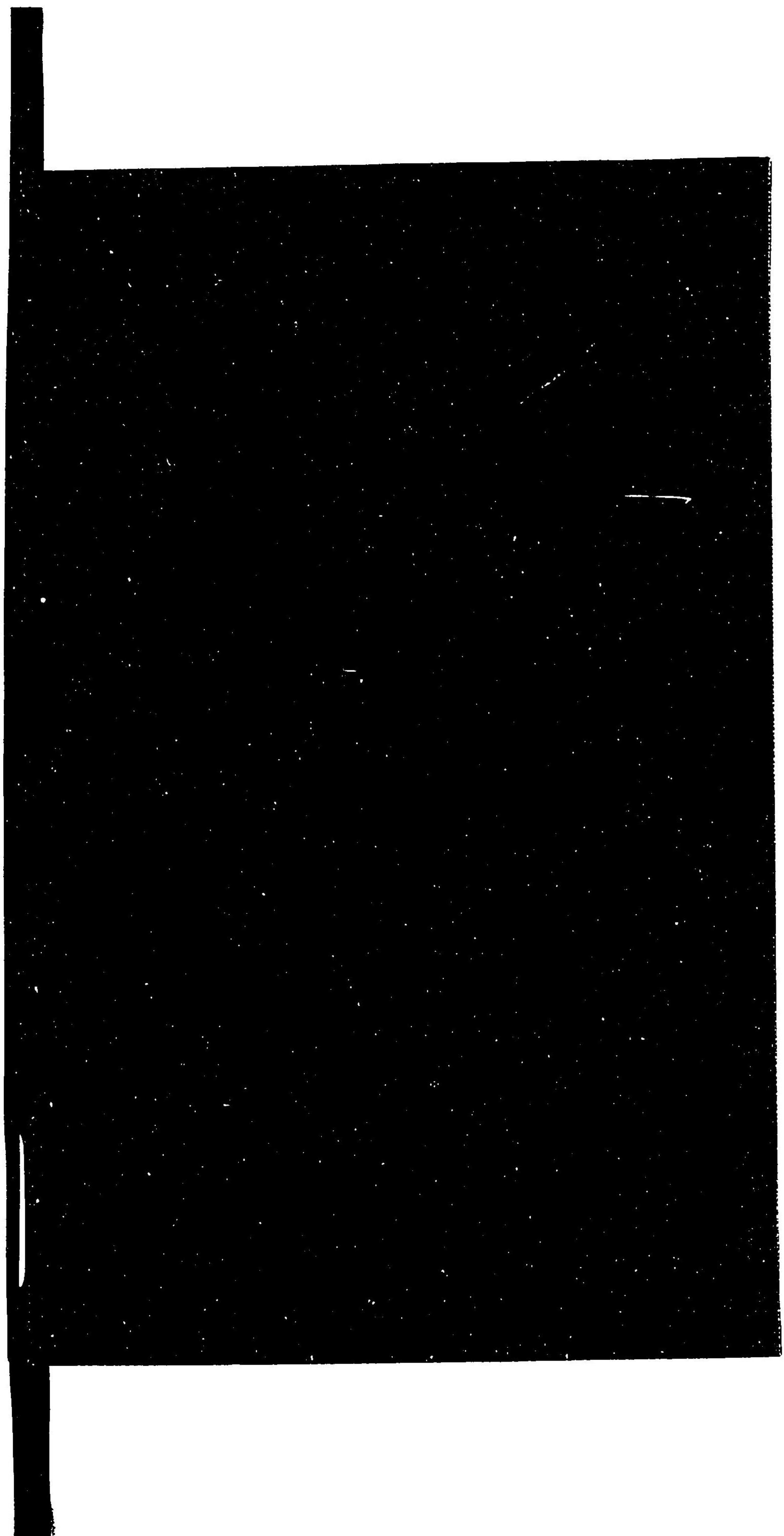














特12

862

097352-000-0

特12-862

血染の片腕 (探偵講談)

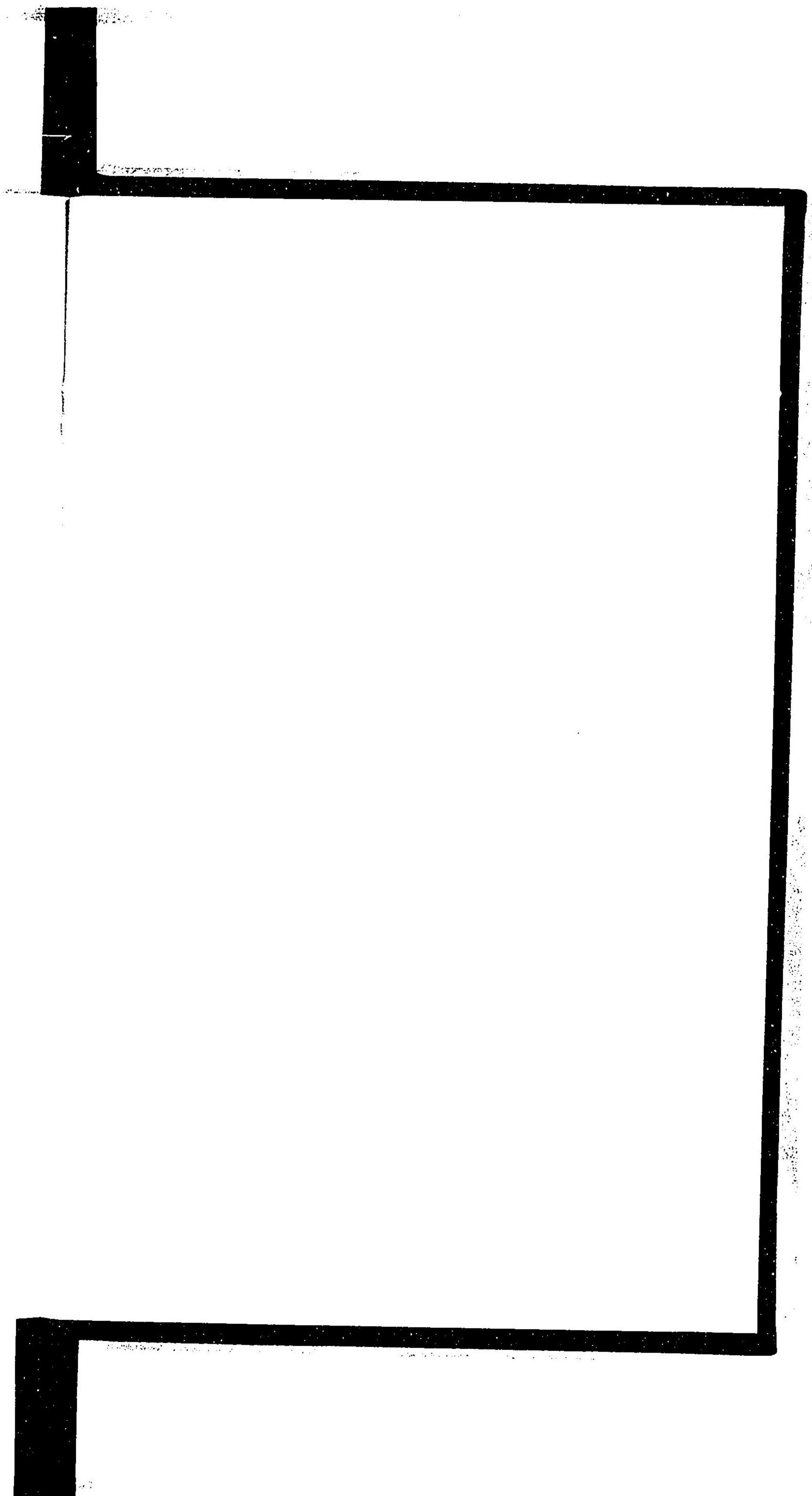
山崎 琴書 / 講演

M34

DBS-1223









Vertical line on the left side of the page.

Vertical bar at the top center of the page.

Vertical bar at the bottom center of the page.